雑説　解答

A　語句の意味と読み

(1) 馬のよしあしを見分ける名人。 ／もとは天馬をつかさどる星の名で、のちに馬を見分ける名人の呼び名になったと伝えられる。今の日本語の「名伯楽（人の才能を見抜いて育てる人）」もここから

(2) そうして初めて。そうなってはじめて。 ／★「Aありて、然る後にBあり」は、Aが先にあって初めてBが成り立つという言い方。Aが条件になる

(3) ただ〜だけ。（限定） ／「唯・只・但・特」なども「ただ」と読む限定の字。訳では「だけ」を添えると限定の意味がはっきりする

(4) （並の馬と）首を並べて（むなしく）死んで。 ／「駢」＝ならべる。名馬が並の馬と同じ扱いのまま、馬小屋で一生を終えることをいう

(5) （えさを与えて）飼う。養う。 ／「食（やしな）ふ」と読む教科書もある。「食べる」と訳すと意味が通らない

(6) しょく／えさ・食べ物（名詞）。⑦の「食（か）ふ」は「飼う・養う」という意味の動詞。 ／★同じ「食」でも読みで意味が変わる。「食飽かざれば」＝えさが十分でないので

(7) あらわれず／（外に）現れない。 ／★「見」を「みる」と読まない。ここでは「現」と同じ意味

B　句法

(8) 部分否定。「いつもいるとは限らない」。「常不有」は全部否定で「いつもいない」。 ／★白文は「不常有」。「不」が「常」の上にあると部分否定。書き下し文の「常には」の「は」が目印

(9) 再読文字のとき＝「まさに〜んとす」と読み、「今にも〜しようとする」の意。／本文の「且つ」＝そのうえ・さらに。 ／「将」と同じ読みの再読文字。ただしこの文章には再読文字として読む字はないので、本文の「且」を「まさに」と読まないこと

(10) 不可能「〜できない」。ここは「（並の馬と同じようであろうとしても）それもできない」。 ／「不可〜」は禁止「〜してはならない」の意味になることもある。ここは、えさが足りず力が出ない馬の話なので不可能

(11) 反語。「どうして〜だろうか、いや〜ない」。 ／★白文の文末は「也」だが、ここでは「や」と読んで反語の結びにする。訳は「いや、求められない」まで書くのが反語の決まり

(12) 不レ以二其道一（「不」にレ点、「以」に二点、「道」に一点） ／読む順は「其→道→以→不」。否定の「不」は助動詞「ず」として読むので、書き下し文ではひらがなで書く

(13) 「嗚呼」＝詠嘆（ああ）。嘆きの気持ちを表す。／「邪」＝疑問（〜か）。 ／「邪」は「耶」と書く本もある。前半を「〜だろうか（いや、そうではない）」と反語のように受け取って説明する教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせる

C　主語・指す内容

(14) 名馬 ／「名馬有りと雖も」の「名馬」が、そのまま「辱められ」「駢死して」「称せられざる」まで続いている

(15) 千里の馬（名馬）にふさわしい、正しい扱い方（走らせ方）。「其」は千里の馬を指す。 ／直前の「之を策つに」の「之」も千里の馬。名馬に見合った乗りこなし方をしない、ということ

(16) 鳴いているのは千里の馬（是の馬）。理解できないのは馬を食ふ者（馬を飼う者）。 ／「其の意に通ずる能はず」の「其」は鳴いた馬。馬が訴えても、飼い主には通じない

(17) 馬を食ふ者 ／「天下に馬無し」と言った人と同じ。名馬がいないのではなく、この人に見る目がないのだと作者は言う

D　口語訳

(18) 千里の馬はいつの世にもいるが、伯楽はいつもいるとは限らない。 ／「常には有らず」は部分否定。「いつもいない」と訳さない

(19) だから、名馬がいても、ただ身分の低い使用人の手で粗末に扱われ、馬小屋の中で（並の馬と）首を並べて死に、千里の馬としてほめたたえられることはないのである。 ／「雖も」＝逆接（〜ても・〜けれども）。「辱められ」は受身で、白文「辱於奴隷人之手」の「於」が、だれにされるのかを示している

(20) そのうえ、並の馬と同じようであろうとしても、それさえできない。（これでは）どうしてその馬に千里を走る能力を求めることができようか、いや、できない。 ／「〜んと欲す」＝〜しようとする。「安くんぞ〜んや」は反語なので「いや、〜ない」まで訳す

(21) ああ、本当に（名）馬がいないのだろうか。（いや、そうではなく）本当は（名）馬を見分けられないのである。※「其れ真に馬を知らざるか」と読む教科書では「それとも、本当は馬を見分けられないのだろうか」と訳す。 ／「知る」はここでは「見分ける・よしあしがわかる」。「其れ」は語調を強める語で、訳さなくてよい

雑説　解答／現代語訳

E　内容・記述

(22)　千里の馬がいても、伯楽に見いだされなければ並の馬として扱われて埋もれてしまい、千里の馬として世に知られることがないから。　／続く「故に名馬有りと雖も……千里を以て称せられざるなり」が、その理由の説明になっている

(23)　伯楽＝人の才能を見抜いて引き立てる人（すぐれた君主・上に立つ者）／千里の馬＝すぐれた才能をもつ人物（人材）。　／★たとえの対応は内容説明で最もねらわれる。伯楽を「名君」「人を見る目のある為政者」などと説明する教科書もあるので、お使いの教科書の言い方に合わせる

(24)　千里の馬は一回の食事で粟一石も食べることがあるのに、飼い主がその能力に気づかず、それにふさわしく飼わないので、えさが足りず力が出ないから。　／「食飽かざれば→力足らず→才の美外に見れず」と、原因から結果へ順に進む流れをおさえる

(25)　才能ある人物がいないのではなく、上に立つ者が人材を見抜けず、正しく用いないだけだということ。(四十六字)　／★馬を食ふ者＝人材を用いる立場の、上に立つ者（為政者）。「天下に馬無し」は、人材を正しく扱わないまま「人がいない」となげく、その人の言葉。作者はそれを打ち消している

F　文学史・思想

(26)　唐／唐宋八大家／柳宗元　／宋の六人＝欧陽脩・蘇洵・蘇軾・蘇轍・曾鞏・王安石。韓愈の字（あざな）は退之（たいし）

(27)　古文復興運動（古文運動）／六朝時代から続く、対句や言葉の飾りを重んじる四六駢儷文（駢文）に反対し、漢以前（先秦・漢）の、内容を重んじる自由な文章（古文）を手本にしようとした。　／この『雑説』も、その古文で書かれた短い論説

(28)　物事について自分の考え・意見を述べる文章（論説）。／『師説』　／『雑説』は四編からなり、この文章はその四番目。「馬説」とも呼ばれる

【現代語訳（全文）】

世の中に（馬のよしあしを見分ける名人である）伯楽がいて、そうして初めて千里の馬（一日に千里も走る名馬）が（千里の馬として）存在する。千里の馬はいつの世にもいるが、伯楽はいつもいるとは限らない。だから、名馬がいても、ただ身分の低い使用人の手で粗末に扱われ、馬小屋の中で（並の馬と）首を並べて死んでいき、千里の馬としてほめたたえられることはないのである。

千里を走る馬は、一回の食事で時には穀物一石を食べ尽くす。（ところが）馬を飼う者は、その馬に千里を走る能力があると知って（それにふさわしく）飼っているのではない。（そのため）この馬は、千里を走る能力があっても、えさが十分でないので力が足りず、すぐれた才能が外に現れない。そのうえ、並の馬と同じようであろうとしても、（それさえ）できない。（これでは）どうしてその馬に千里を走る能力を求めることができようか（いや、できない）。

（千里の馬を）むちで打って走らせるのに、それにふさわしいやり方でせず、飼うのに、その才能を出し尽くさせることができず、（馬が）鳴いて訴えても、その気持ちを理解することができない。（そのくせ）むちを手にして馬に向かって、「天下には（よい）馬がいない」と言う。ああ、本当に馬がいないのだろうか。（いや、そうではなく）本当は馬を見分けられないのである。

▸ 漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/kanbun-sankousho/　　▸ 解説記事にもどる